

## <百日咳菌の感染が大人や年長児で増加しています。>

感染力の強い病気です。感染した大人は長く苦しい咳が続きますが死亡することはめったにありません。しかし、赤ちゃん、新生児でかかると、6か月以下、特に3か月以下の乳児の感染では重症化し命にかかわることがあります。

低年齢で感染すると症状が重くなるので、多くの国では生後2か月頃からワクチンの接種を開始しています。また、米国では新生児の百日せきを予防するために、成人用三種混合ワクチンDPT(Tdap)を妊婦に接種して胎児への移行抗体を増加させることもおこなわれ、妊娠27～36週での接種が勧められています。

☆日本小児科学会は学童期以降の百日咳とポリオに対する免疫を維持するために、就学前の三種混合(ジフテリア・百日咳・ポリオ)ワクチンと不活化ポリオワクチンの追加接種を推奨しています。

また、11歳から受けることになっている定期接種の二種混合(ジフテリア・破傷風)ワクチンを三種混合ワクチンに変える、ないしはその後に追加することも可能です。

すべて任意接種(有料)になりますが、目前にある罹患リスクの予防、子どもが親になるときに免疫が続いているようにする対策として追加接種が推奨されます。なお現時点で、就学前の3種混合ワクチンとポリオワクチンの接種を4種混合ワクチンで代用することは承認されていません。4種混合ワクチンは4回までの接種に限られ、5回目以降の追加接種については、3種混合ワクチンかポリオワクチンを用いることになっています。

## <ポリオの蔓延が 心配されています>

ポリオはポリオウイルスによって感染し、多くの場合は無症状か、出ても風邪のような症状だけです。しかし約1,000～2,000人に1人は手足に麻痺が出て運動障害が一生の後遺症として残ります。日本でもかつて大流行しました。その時は母親たちがマスコミとともにポリオ撲滅の大活動を行い、当時の厚生大臣はカナダや国交が回復した直後のソ連から使用し始めたばかりのポリオの生ワクチンを緊急輸入して、子どもたちに投与しました。するとまたたく間に流行がおさまりました。日本人の高い衛生管理意識で、通常必要量とされるより少ない2回接種で収まったのです。世界ではポリオウイルスは激減しています。しかし南アジアやアフリカなどのごく一部の地域では現在でも流行しています。なかなか根絶できず、ワクチンを飲まなくなった地域で流行がおこっています。欧米でも、宗教上の理由でワクチンを拒否する人たちの子どもの間で流行したことがあります。

また生ワクチンによる副作用として、生ワクチン関連麻痺が400万回投与辺り1例 報告されました。更に生ワクチン接種者の便中に排出された伝播型ワクチン由来ウイルスによる感染は530万回あたり1例報告されました。そのため安全性の高い不活化ポリオワクチンが選択されるようになり(2012年9月)、4音種混合ワクチンが承認され導入されました(2012年11月)。

日本では、約30年前から患者は出ていませんが、世界との交流が盛んな現在ではワクチンの接種を長い間中止すれば必ず流行がおこると考えられています。

☆単独のポリオワクチン(IPV)の小学校の就学前接種が推奨されています。

海外では、小学校入学前の時期にポリオワクチンの5回目を接種しているところがほとんどです。

カナダ、スイス、ベルギー、ハンガリー、ポルトガル: 乳児期に3回、半年から1年後に4回目、4～7歳で5回目

ドイツ : 9～17歳で5回目

アメリカ、スウェーデン、ギリシャ、オーストラリア、ニュージーランド、韓国 : 4～6歳で4回目

イギリス、フランス : 乳児期に3回、3～6歳で4回目、11～14歳で5回目

就学前後に相当する年齢で接種がなされていない先進国は 日本とスロベニアだけです。

2020年3月 自治体独自の予算で公費助成がなされている10市町

青森県藤崎町、石川県かほく市、埼玉県鴻巣市、千葉県いずみ市、兵庫県西脇市、兵庫県多可町、兵庫県佐用町、大分県竹田市、大分県津久見市、大分県豊後高田市

下線はDPTワクチンも公費助成しています。